東海新聞　平成22年(2010年)9月9日（木曜日）

気仙坂

リレーエッセイが発する力

本紙で連載中の「五葉山の魅力」リレーエッセイは、これまでの連載回数が99回を数え、次回掲載分で節目の100回を迎える。

リレーエッセイは、五葉山や五葉山麓に愛着を持ち、その魅力を共有する気仙内外の有志で組織された五葉山自然倶楽部の創立10年記念事業として、平成20年9月28日から連載がスタートした。10年2月に設立された同倶楽部は、五葉山と周辺の豊かな自然を後世に残し、その素晴らしさを伝えようと、フォーラムや写真展、自然観察会、登山会など幅広い活動を展開しており、リレーエッセイの連載もその活動の一環として企画された。

週1回のペースで掲載されているエッセイは、同倶楽部の会員が中心となって執筆。その経歴や社会的立場は様々だが、執筆者は五葉山の魅力を伝えるという共通目的の中で自然への畏敬や五葉山への愛着を語り、一人ひとりが自分自身と向き合いながら内面世界や人生観を綴るなど、毎回、味わい深いエッセイをリレーし、多くの読者の心をつかんでいる。

同倶楽部の事務局長でリレーエッセイの企画・編集を担当している千葉修悦さん（住田町）は、これまで2年にわたって連載を重ねてきた中で「リレーエッセイの持つ内発力の高さに気づかされた」と語る。五葉山を愛する仲間たちのエッセイは、今日の社会風潮、世相を直視し、「今、何を好ましいと考えるか」ということを真摯に見据えながら、「共に存し、共に生きることの尊さ」など現代に生きるわれわれが忘れかけていること、失いつつあるものを思い起こさせる、というのだ。

自分も内から発する力を実感したいと、これまでに掲載されたエッセイをいくつか読み返し、その一つひとつに読者への暗示的な問いかけがある、という千葉さんの指摘に頷いた。

例えば、「共に存し、共に生きることの尊さ」について、あるエッセイは「人間は自然の一部として生かされていることを認識しているか」という問いを発していた。

別のエッセイの読後に湧いてきたのは「他者の幸せを願う生き方をしているか」「自分と違う『個』を認めているか」という自問だった。多くのエッセイに潜在していた「今、何を好ましいと考えるか」というテーマは、自分の人生の座標軸をどんな基準でどこに据えるかという問題への自発的な思考を読む者に促す。

同倶楽部は、100回を一つの区切りとして今年10月いっぱいでリレーエッセイの連載を終え、来年1月から新たな企画「五葉山からの贈り物」～共に有り、共に生きる～（仮称）の連載をスタートさせる。来年8月まで30回程度の連載を予定しており、「自分の思いを改めて伝えたい」というリレーエッセイの執筆者からの寄稿や、リレーエッセイに対する一般読者の感想、提言などを募っている。

新企画について千葉さんは、「気仙という一地域における主張や提言にとどまるものではない」と強調。

その取り組みの狙いを「今日の日本人のありよう、日本社会のありようをも射程にとらえていこうとする試み。全国に向けた問いを発していきたい」と説明する。

リレーエッセイが発する力は、筆者含め多くの読者の心に深く作用し、根源的な何かを考えさせてきた。その成果を深化させる新企画の連載開始を、一読者として今から楽しみにしている。

読者の声の募集期間は11月30日まで。寄せられた原稿は、同倶楽部で整理、分類のうえ、紙面掲載する。

新連載に関する問い合わせ、原稿の提出は千葉さん（〒029・2501　住田町上有住字天嶽197の1、TEL0192・48・2196、Eメール：narachan@mx91.tiki.ne.jp）まで。

（一）